平成 21 年度一橋大学附属図書館企画展示「一橋大学の歩み」
講演会　平成 21 年 11 月 5 日（木）

「国立大学町の開発と東京商科大学」

一橋大学大学院社会学研究科　田﨑宣義

（田﨑）　皆さん、こんにちは。田﨑と申します。今日は附属図書館の今年度の企画展示として、「一橋大学の歩み：キーワードで知る学園史」が行われまして、その一環として皆さんにお話をしろということで準備をいたしました。私がお話をするのは、この国立大学町といわれる新しい開発地の誕生と、今は一橋大学と言っていますが、当時の東京商科大学との関係についてお話をしていこうと思います。

最初にお見せしている 2 枚の絵はがきですが、上の方は駅前の広場です。もう駅舎もなくなってすっかり様変わりしてしまいましたけれども、この駅舎の前の方に金網の丸いのがご覧いただけると思います。今はこの金網の下の池だけが残っていますが、水鳥を飼っていたんですね。ツルとか、ペリカンとか、そういう鳥がこの籠の中に入っていまして、この国立の大学町に最初に来た商科大学の学生さんの回想を読みますと、朝はツルの一声で目が覚めたと、そういう話も出てくる鳥籠です。

これはもともと、この土地を開発した堤康次郎という、西武の創業者ですが、その方が新宿園という遊園地を新宿に持っていまして、今の場所は厚生年金会館のあたりなんですが、その新宿園は、遊園地としてはあまり成功しなかったということと、後でお話ししますが開発がなかなか順調にいきませんで、それからまた堤さんが事業をうんと広げたこともあって、資金難に陥ってしまうわけです。

そこで国立開発の資金をつくり出すために新宿園を売り払うんですね。売り払ったんですけど、そこで飼っていたクマとか、ツルとかペリカンをどうしようかというので、国立の新しく開発した町の中にそれを全部持ってきました。ですから、国立駅ができた頃には、駅前はツルとかペリカンがいまして、今の音大附属高校の前にはオリがあってクマがいたと。夜になるとタヌキやキツネが歩いていた。そういう町になるわけです。

それでは本日の本題に入りたいと思います。今日は落語ではないですが、三題噺ということで 3 つ、お話をしていきます。1 つは大学の移転がいつ決まったのか。それからもう 1 つは、国立大学町の開発構想、これはどういうものだったのか。一般には堤さんが関東大震災の後で学園都市構想というものを考えだして、大泉学園と小平学園と国立を開発したといわれていますが、今まで私が調べたところでは、どうもそれはそのまま鵜呑みにできないように思います。そこで今日はなぜ鵜呑みにできないかということと、開発構想を考え出した人はいったい誰なのかというお話をしていこうと思います。そして 3 つめは、今お話ししたこの国立は堤康次郎が開発して、東京商科大学を誘致したというのが一般的な見方ですが、それも含めて国立には伝説がたくさんあるんですね。その中からいくつか取り上げて、それを検証してみようということで、この 3 つのテーマでお話をしていきたいと思います。

最初に大学の移転はいつ決まったかということですが、今まで最も広くいわれていたのは、この原田重久という方の回想です。この原田さんという方は国立の本村地区にお住まいの方で、もう亡くなりましたが、郷土史家として大変有名な方です。そしてこの大学町開発のころは、ちょうど谷保村役場の庶務主任をなさっていまして、従って堤さんたちが村にやって来たときには、村長と一緒に立ち会ったという方なんですね。

原田さんはいろいろなところで回想を書いていらっしゃいますし、それから国立の町についての歴史の本も書いていらっしゃいます。その原田さんの回想の中から今日は『多摩のあゆみ』第 41 号、だい

ぶ前の号ですが、それに「大正時代の谷保村と国立学園都市の開発」というものがありますので、そこからご紹介したいと思います。

まずはこの『多摩のあゆみ』の「国立学園都市」という言い方に注意をしていただきたいと思います。堤康次郎さんが開発されたのは今、お話ししましたように大泉、小平、国立ですが、大泉は大泉学園、小平も小平学園、そして国立だけは、ここでは「国立学園都市」と言っていますが、「国立学園」という言い方はあまりしないんですね。「国立大学町」と言います。「国立大学町」という資料は附属図書館の企画展示の中にも出してありますので、あとでお時間があれば見ていただきたいと思いますが、宅地を買う契約を結んだ書類の下書きだろうと思いますが、それが大学の中に残っていまして、それを見ますと、この辺は北多摩郡谷保村なのですが、土地の住所が北多摩郡国立大学町何番地となっています。

そういうふうに、当時国立大学町と呼ばれていたんですが、それを原田さんは「国立学園都市」と読み替えて、この『多摩のあゆみ』を書かれています。それは堤さんの「学園都市」構想に基づいて開発されたと原田さんが考えておられたからだろうと思うのです。

ここでちょっと脱線しますと、この原田さんは戦後も谷保村の役場に勤めていたんですが、戦後まもなく、東京都が「東京都歌」を公募いたしまして、それに 1 等賞で当選するんです。今は都歌を歌える方はあまりおられないと思います。私は歌えないどころか、そんな歌があるのも知らなかったのですが、応募した歌詞が 1 等で当選して、当時で大変なお金をもらいます。それから役場を辞めて文筆の方に進まれまして、NHK 専属の放送作家とか、映画のシナリオを書いたりしておられます。地元の国立高校の校歌もこの原田さんの作詞です。郷土史や民俗の研究でも有名ですが、ともかく大変文才のある方です。

そこで「大正時代の谷保村と国立学園都市の開発」を読んでみますと、「大正十三年八月のある日、甲州街道沿いにある谷保村役場のわきに、一台の黒塗りの自動車が横付けにされた。自動車には箱根土地株式会社の社長堤康次郎と専務の中島陟、それに越丸八重蔵という社員が乗っていた」と書いてあります。このころの甲州街道はもちろん砂利道で、自動車なんかたまにしか通らない。村の中には自転車も数えるほどしかないような時代で、皆さんはたいがい府中にも、立川にも歩いて通っていたころです。そこに自動車が横付けにされたというのは、それだけで大事件ですが、そこで買収の話が始まったと原田さんは書いておられます。

大正 13 年 8 月というのは、前の年が大正 12 年で関東大震災の年です。大正 12 年 9 月 1 日が関東大震災ですから、ちょうど 1 年後に谷保村役場に箱根土地の人たちが乗り付けて、そこから開発の話が始まったというのが原田さんの回想です。当時、村役場におられた方ですし、それから郷土史家でもありますから、皆さん、私も含めて、この説に全面的に依存していました。開発の話は震災の 1 年後から始まったのですね、と。

ところが、調べていくと、これが意外にも怪しい箇所が多い。例えば、このときの箱根土地の社長は堤さんと書いてありますが、実際にはそうではありません。社長は藤田謙一という人なんです。堤さんは専務取締役、重役ですね。ですから堤さんは社長さんではないということなのです。後で藤田謙一さんは出てきますが、この藤田さんは今はまったく名前が知られていないのですが、このころは大変な実業家で、この方が経営に参画している会社は、10 社や 20 社じゃないのです。すごい数の会社の経営に

参画しておられて、たいへん著名な財界人でした。

藤田さんは明治大学の卒業なので、明治大学の商議委員、商議委員というのは商売の商に国会議員の議員と書くのですが、当時、私立大学とか、それから一橋も大学になる前は商議員が置かれていましたが、商議委員というのは学校経営を後援して相談に乗る方です。そういうこともなさっていたのですね。明治大学の卒業生の中では、最も出世をした方の一人だったのです。その方の下で堤さんは専務取締役をやっていました。ただ、図書館の展示にもありますが、大学の敷地を大学が購入するときの契約の相手は、専務取締役の堤康次郎さんで、社長の藤田謙一さんではないのですね。

藤田さんという方は、ものすごくたくさんの会社の社長をなさっていて、当時は有名な方なのですが、今の社長は会社の経営の実権を握っていますけれど、当時はどうも株式を募集するのに、知名度の高い人を社長とか重役に並べて、それで株を募集して、実際にはあまり名も知られていない若い人が会社を運営する、そういうスタイルがあったようで、箱根土地もどうもそれらしいような気がいたします。ですから、この後でお話しするときに出てくるのは必ず堤さんで、藤田謙一さんは 1 回も表に出てきません。

そこで、話を元に戻しまして、関東大震災の翌年の 8 月に谷保村に箱根土地から開発の話が持ち込まれて、ここから大学町開発が始まったというのが従来の説です。そこで調べてみたら、これは怪しいと申し上げましたけど、まず 1 つの例を。

この画像は、谷保小学校が大正 13 年 6 月につくった『北多摩郡谷保村郷土誌』という冊子です。大正 13 年の 6 月というのは、今お話しした黒塗りの自動車が来る 2 か月前です。この郷土誌の画像の左側に、郷土誌に載っている地図があります。ちょっと見にくいですが、この地図の中央線のすぐ下に「文化住宅地」と書いてあります。これは何かというと、「文化」というのは、第 1 次世界大戦後に流行る、この時代を象徴する言葉なんです。明治は文明といいましたけど、大正は文化です。

そこで、この「文化住宅地」というのは何かといいますと、関東大震災を挟んで、箱根土地が目白に、落合というところですね、落合に「文化村」というのをつくります。「目白文化村」です。写真を用意すればよかったのですが、写真を見ると洋館がずっと並んでいる町なんです。日本の住宅地とは思えない。そこで一躍この「目白文化村」は大変有名になりまして、当時の東京帝国大学の教授であるとか、それから高級官僚だとか、財界の有名な方とか、そういう方が住んだんですね。高級住宅地です。

今は大学の数がとても沢山ありますから、大学教授なんていってもただの「おじさん」、「おばさん」ですが、このころの帝国大学は数が少ない。内地には北大を含めて 5 つだけです。教授の中でも偉い方は高等官待遇、そういう人たちが住んだのです。

堤さんは、この超高級住宅地「目白文化村」を開発して分譲するのですが、実際にこの『谷保村郷土誌』の本文を見てみますと、これが最後のページになるんですが、今日お配りしました資料の 1 枚目「大学の移転はいつ決まったか」というところの、谷保村側の資料として、谷保尋常高等小学校の『谷保村郷土誌』を出しました。ここに引用してあります。「昨年末ヨリ山林畑ヲ合セテ二百町歩程」換算しますとだいたい 60 万坪になるのですが、「有志ノ奔走ニヨリ文化住宅地トシテ箱根土地株式会社トノ間ニ売買契約成立シ大正十三年六月ヨリ其ノ實行ニ着手ス 順當ニ過行ノ暁ハ一変セル谷保村タルニ至ラン亦村民モカクアラス可ク努力スルニ至レリ」。

この『谷保村郷土誌』は、先ほどお話ししましたように、大正 13 年、堤さんたちが谷保村に来た年の 6 月にできました。その本に「昨年末」と書いてあるということは、大正 12 年、関東大震災の年の終わりの方で土地を売買するという話がまとまっていることになるわけです。そうすると今まで、国立とか学園都市構想の研究の中で、通説として扱われていた原田さんの話はこれと合わない。関東大震災の年にもう大学移転の話も決まっている可能性があるということになるわけです。

もう少しそれを見ていきますと、お手元の資料のここに「二百万町歩六〇万坪」と振ってありますが、これはやはり回想ですが、「国立を語る」『国立町報』、これは国立町のころの町の広報ですね、それの昭和 31 年 1 月 1 日のお正月号に「国立を語る」という特集があります。そこに三田章作さん、それから後でご紹介しますが、西野清さんという方が回想を寄せておられます。三田章作さんという方は、息子さんが三田敏哉さんとおっしゃいまして、この間まで都議会議員だった方ですね。その方のお父さんです。

そこでプリントを見ていただきまして、1 ページの谷保村側の 2 つ目、三田章作。「大正 12 年 9 月 1 日、関東大震災を受けたことから商科大学（現一橋大）の移転話がもち上ったのです。そこで、箱根土地が誘致の運動に乗りだし、当時、雑木と松の林だった国立 100 万坪が候補地にあげられました。それに対し大学側では、箱根土地が国立 100 万坪の土地をまとめあげて設計し、欧米風な学園都市を将来実現することができること――現在一橋大学のある赤松林を大学の敷地にすることを移転の条件にしたのです。箱根土地では、早速、谷保村地元の説得にかかり 100 万坪の買収に着手したのです。」という話があります。

そして、この 100 万坪は、雑木林とはいいながら、当時は枝とか枯れ葉とかそういうものは、焚き付けにするとか薪にするとか、それから堆肥を作る材料ですから、それを開発してしまうというのは、農家にとってはかなり大きな変化になるわけです。そのことがちょっとここに書いてありますので、読んでみます。

「それが国立 100 万坪を失うことになれば、いきおい燃料と堆肥の出どころである山林 100 町のほとんどを同時に失うことになるので反対する人達もありました。然し「将来一 100 万坪が開発されて町として発展すれば、そこからでる税金によって町の財政は維持されていくことができる。それは先祖伝来の土地を守り抜くことになるのだ。」という地主たちによって、土地を売ることに多くの人達の意見が傾いた。」

ここに出てくる、町の税金を新しくできた町に全部払ってもらおうという考え方なんですが、当時の考え方に、不要公課町村という考え方がありました。不要公課町村というのは、住民税を払わなくても町の財政が運営できるということです。これは、明治 21 年にできました市制町村制の中で新しい近代の村や町ができるわけですが、その村や町の目標、村や町を運営するときの目標は不要公課町村になることだったんですね。

その不要公課町村に近い町村ほど優良町村として表彰されたり、注目されたりしたわけです。ですから、どこの町村を運営する人たちも不要公課町村を目指すわけですね。逆に税金が多いということはその村が貧しいことの証拠で、褒められたことではないと、そういう時代だったんです。そこでここに出てくるように、そこから出る税金で町の財政が維持できるとなると、古くから住んでいた人にとっては、

不要公課町村と同じ形になるということで、これが説得力を持つわけですね。

またプリントに戻っていただきまして、また「＜中略＞」の後です。「当時、国立 100 万坪の 4 割はコシコク」、コシコクというのは三越の「越」でコクというのはお米の採れ高ですが、「越石」というのは自分たちのところで採れたお米を地主に小作料、地代として払います。そのときに村を越えて出てしまう小作料を越石と言うんです。つまり他町村の人が土地を持っていて、その分が村から流れ出る。不要公課町村の考え方でいくと、越石が多いほど村は貧しくなってしまうわけですね。その状態を「越石」と言います。私たちは普通、「不在地主」という言い方をするんですが、このころの谷保の人たちはこれを「越石」と呼んでいたわけですが、その「越石」によって所有されていたのが山林の 4 割。「地元地主達の間に土地売却を説得するための委員会が結成され、各部落 2 名づつの委員達が手分けして南多摩、西府、国分寺、立川」と。西府というのは今、府中市にほとんど入っていますが、谷保村と府中の間にあった村です。

「はては東京まで足を伸ばして」、東京というのは東京の市内でしょう。

> コシコク説得のために歩き回ったのです。（時は大正 13 年の暮れ、説得するのに 1 カ年の月日をついやしました）当時私は 28 歳でしたが、一緒に歩いた委員方のほとんどが故人となってしまったのは感無量です。とにかくそのような訳で、箱根土地は国立 100 万坪の土地買収に成功して、大正 13 年 12 月 1 日から国立開発に着手しました。
>
> 開発にあたって箱根土地では商科大学移転の条件にもある欧米風の学園都市を設計するため、欧米帰りの中島技師を設計にあてました。

この中島技師というのは先ほど出てきた、専務の中島陟という方です。「中島技師は自分の目で見てきたオックスフォード、ロンドンなどの道路やスイスのドライブウェイを参考にして日本では珍らしい現在の放射線道路を中心とした町の土台を設計したのです。」と出てきます。

次の 2 ページの初めの方ですが、「その後箱根土地は大学敷地として 10 万坪を寄付、駅、専門部校舎（木造）、郵便局を建設して、それぞれの筋に寄付するなど大いに開発のための努力をしましたが、昭和 4、5、6、7 年の不況時代に入り」、大恐慌といわれた時代です、「箱根土地も危機に当面してしまいました。」ということで大変なことになるわけです。

この三田章作さんの回想ですと、やはり大正 12 年に話が始まって、12 年から 13 年にかけて 4 割の地主の説得に歩いて、13 年の暮れからいよいよ工事が始まったと出てまいります。

次に今度は西野さんの回想を見ていただきます。西野さんという方は終戦間近の時期に、谷保村の助役をなさっています。そして戦後、村長が公職追放になってしまいまして村長をなさった方が西野さん。この方が回想をされています。

> 一橋大学移転の話がもち上がったのは大正 12 年秋で、箱根土地会社の社長堤康次郎と、一橋大初代学長佐野善作氏が国立を訪れて山林を下見していったことを覚えています。現在一橋大がある松林地帯を非常に理想的な良い場所だと言って帰ったそうですがそれから一橋の誘致が始まった

のです。

　その後、専門部仮校舎が完成して昭和 2 年 4 月移転をしたのですが、当時は国立も寂しいところで、汽車は 1 時間おきにしかとまらない有様でした。とにかく一橋大の移転は、欧米の学園都市を見ならった都市を建設するのが条件で、この計画ができなかったら、わざわざ国立に移転してくることはなかったのです。

と言っています。

　そうすると時期はやはり大正 12 年の秋ということになります。ここに出てくる佐野学長の銅像がキャンパスの中に建っています。大学の正門を入りまして、左の方にずっと来ていただくと芝生の一番大学通り寄りの端に立っている全身像です。立派なひげが生えています。この下見のときに、あのひげにクモの巣がくっついたという話が学生の間でうわさになったという話もありますが、現地を見たのは大正 12 年の秋となりますと、やはり原田さんの回想とは辻褄が合わない。

　今のは村の人たちの回想ですが、今度は大学側の回想をご覧いただきます。これはプリントでご覧いただきますが、山口茂という先生が 1951 年 5 月にやはり回想を書いています。ちょっと読み上げます。

　大正 12 年 9 月 1 日の震災によって商大も校舎は使用に堪えなくなってしまったが、大切な図書館は無事であった。東大も慶応も共に貴重な図書館を烏有に帰してしまったが、わが商大はその難を免れた。

今残っている大学では、このとき早稲田も蔵書が残ったんです。

　殊にその年の夏休み中かかって整理したメンガー文庫は、書架から落ちてごちゃごちゃになってしまったが、焼けないで済んだときの吾々の喜びは筆舌につくしがたいものがあった。吾々は 2 人ずつ組になって夜警に当り、図書館を護ることになった。かけだしの吾々は地下足袋とゲートル姿で、握飯を腰に夜警もし図書の並べ直しをやっている間に移転問題がきまって国立へ越すことになったのである。

　国立と云っても立川と国分寺の間というだけで部落があるわけではない。12 年の晩秋の一日、村松君と 2 人で学校の移転先をみようと思って出掛けたことがあった。

と出てきます。あとは当時のこの辺りの様子が書かれています。

　これを見ていただくとお分かりの通り、やはり大学の先生方の間でも移転の決まったのは大正 12 年だという証言が出てまいります。

　そうするとこれは、原田さんの記憶違いではないかということになるわけですが、では「晩秋」というのは一体いつ頃なのでしょうかということですが、関東大震災が 9 月 1 日です。授業の再開がその年の 12 月 1 日です。お配りした年表をちょっと先に進んでいただきますと、1924 年 1 月 30 日に大学移転の予算が国会で流れてしまったということが出てきます。

大正 13 年度予算に乗っていた移転の予算が流れてしまったということは大正 12 年中に、ある程度移転の話の目鼻が付いてないことには、予算化はできないわけですから、要求もできないわけです。ということは、やはり予算の面から見ても、大正 13 年 8 月という話はおかしいということになります。そして「晩秋」というのは、おそらく授業再開の前じゃないかと。

そこで今までの話を入れてみますと、秋に移転の話が持ち上がりました。晩秋に移転予定地を訪れました。冬に「越石」の説得が始まります、おそらく農閑期ですね。そして、大学の予算が流れます、と。そういう流れが見えてきます。

このころはご存じのように帝国憲法の時代です。今は予算が流れるなんていうことはないですね。臨時国会をやったり、会期を延長したりして、とにかく予算が成立するまで国会をやります。帝国憲法のときはそうではなくて、予算が流れると前年度の予算を執行するんです。そうすると、12 年度の予算には関東大震災は盛り込まれていませんから、12 年度予算を執行するということは、大学の移転は 1 年遅れちゃうということなんですね。

そこで予算が流れて 12 年度予算を執行します。それからそのすぐ後、ほとんど 1 週間後ですね。土地の交換契約を結びます。この土地の交換というのは、神田の土地とこの国立の新しい土地を取り替えっこするという契約を結びます。そして、次の年の 4 月になると、つまり 14 年度、移転の予算が付いたときには買収予定地 97 万坪のうち、21%が買収済みで 43%が契約済みというところまでいっているということが分かっています。そういうふうにして見ていきますと、関東大震災が起きてから 3 か月ぐらいの間に国立への移転がもう決まっていたということになるわけです。

今の私たちはものすごく忙しい。どんどんと世の中が変わっていくので忙しく過ごしていますけれども、今の私たちでも移転地を 3 か月で決めることは不可能ではないかと思います。けれども、いろいろな資料を突き合わせると、こうとしか考えられない。やはり関東大震災が終わった後、3 か月ぐらいの間にここへ移転することが決まったとしか考えようがない。信じられないですけれども、資料を突き合わせていくとそうとしか言えないことになります。

そこでそれでは、大学町の開発の構想の内容ですけれども、その前に簡単にどんな流れでいくかをお話しいたします。

1926 年、大正 15 年、昭和元年でもありますが、箱根土地は本社を駅前の今の多摩信の場所に動かしてきます。そして 4 月に国立駅が開業いたします。それから 4 月 19 日に国立学園小学校が開校します。そして 11 月には東京高等音楽学院、今の国立音楽大学ですが、その新校舎が落成しまして移転します。それから次の年、昭和 2 年 3 月に兼松講堂の上棟式がありまして、4 月に国立郵便局が開局いたします。そしてその 4 月に商科大学の専門部と教員養成所が移転してきまして、秋に兼松講堂が完成します。そして昭和 4 年 6 月に省線電車の営業運転が始まります。そして次の年に商科大学が最終的な移転を終わります。

こんなふうにして、実際の町の開発の動きは 1925 年（大正 14 年）から表に出てくるんですね。ですが、今お話ししたように移転が決まるのは、もう大正 12 年、2 年前に決まっていたということになるわけです。

文部省から正式の認可をもらいませんと、移転ができないわけですが、その正式な認可をもらったのが大正 14 年度予算が成立した後の 9 月、1925 年ですが、文部省と大蔵省から移転が正式に認可されます。そして 11 月に『一橋新聞』に佐野学長の談話が載ります。

ところで、『一橋新聞』を「いっきょう」と私たちは呼びます。今は一橋大学ですから、画面の上端にも書いてありますが、あれで一橋（ひとつばし）と読みますけれど、あれを「ひとつばし」と読むようになったのは新制大学になってからなんです。それ以前は、例外もありますけど、ほぼ「いっきょう」です。

当時、今でもそうですが、例えば駒場とか、三田とか、早稲田は場所と学校の名前が同じですが、駒場といえば東大、三田といえば慶應というふうに大学の名前をその地名で呼ぶ習慣がありますね。そして、駿河台というと明治かな、日大かなと思うわけですが、その習慣が戦前からありました。一橋大学は神田一ツ橋にありましたので一ツ橋と呼んでいたんですね。「一ツ橋の学生さん」とか、そういうふうに言われていたのですが、それを大学の中の人たちは「ツ」を取って「いっきょう」と呼んでいたんです。それで、大学の構成員全体を指して「全一橋人」なんていう言葉もあります。それを省略して「橋人（きょうじん）」ということもあるわけです。寮歌にも「橋人うまず築きゆく自由の砦、自治の城」という歌詞がありますが、それも「一橋の全員が力を合わせて」、そういう意味なんですね。

それから「一橋祭」という大学祭も「いっきょうさい」ですね。そういうふうに「一橋」と書いて「いっきょう」と呼ぶのがこの頃なんですね。ですから新聞の名前も『一橋（いっきょう）新聞』なんですが、その『一橋新聞』の中で学長が移転の談話を発表します。この談話は後の方で大事になりますので、ちょっと頭に置いておいていただければと思います。

そして校舎の方は、この年表のように、まず最初にグラウンドができます。これは 400 メートルトラックで東京で 2 番目の 400 メートルトラックです。1 番目が神宮外苑、2 番目がこの国立のグラウンドです。神宮外苑はアンツーカーになっていますけど、うちの方はまだ自然の土ですが、なにしろ東京で 2 番目です。

それから専門部の仮校舎があります。当時、「仮校舎」という言葉と「本建築」という言葉がありまして、「本建築」というのは今、皆さんがご覧のような兼松講堂だとか、図書館とか、本館であるとかが「本建築」です。それに対して木造を「仮校舎」と呼んでいます。

この「仮校舎」ですが、先ほど見ていただきましたように、1926 年になりますと大学町の中に、学校ができてきます。学園小学校ができて、駅ができて、音楽大学ができてというふうにして、町の中に学校と駅ができてきます。そうすると堤さんにしてみれば早く人が住んでほしい。いつまでたってもキツネやタヌキばかりでは困るというわけですが、商大は「本建築」にものすごくこだわるんです。「本建築、本建築」と。何年かかってでも、ともかく本建築という感じで、大正 20 年までに移転できれば上出来だとか言っているんですね。

そこで困った堤さんは、専門部と商業教員養成所の校舎を寄付します。それから寮も寄付します。それで寄付のときに「本建築」ではなくて木造だったんです。その木造の校舎を寄付して、そこで大学も移転します。それがこの移転式という、1927 年、ここで移転するわけです。ですからこれは堤さんがしびれを切らせて、このころ財政的にもかなり箱根土地は大変だったんですけれども、お金を出して商

大に来てもらったんですね。その学生の第 1 陣がさき程お話ししたように「ツルの一声で目が覚めた」と、そういうことを書いているわけです。

そしていよいよ移転の認可が下りましたので、1925（大正 14）年 9 月 9 日に土地交換の契約書、さらに覚書を 3 日後に結びます。9 月 9 日の契約書は企画展の中で展示をしていますので、それを見ていただければと思いますが、この下の写真は開発当時の写真です。

これが大変不思議な写真でして、なぜ不思議かといいますと、この角が増田書店の場所ですね。次が紀ノ国屋、その次がバーミヤン、その次、これは大学の中なんです。この道、これもです。キャンパスの中に道がある。写真を修正して書き込んだのか、最初は本当に道があったのかが分からないのです。どなたかご存知の方はいらっしゃいますか。この絵はがきはよく使われているんです。でも、こうやって今のお店の場所を落とすとおかしいなと。もし分かりましたら教えてください。

そこで覚書ですけれども、展示はしてありますので後でご覧いただくことにしまして、この町のどこがどういうふうに規定されているか、ちょっと簡単にご説明したいと思います。

まず最初に、これはたまらん坂を抜けて国分寺の駅まで行く道ですが、これは先ほどの契約書の第 6 条の中で、まず一番はじめに造ることが決まっています。それはなぜかといいますと、開発するときに必要な道具、それから材料、それから大学の校舎を造るのに必要なものの運搬路を確保するために、この道を最初に造ることが決まっています。駅を造る、これも決まっています。

それから覚書では駅前広場を 3,000 坪の大きさで造ることが決まっています。それから大学通りの広さが決まっています。旭通り、富士見通りも覚書で決められています。そしてそれ以外の道は整然とした区画にすることが決められていまして、町の骨格は大学と箱根土地の契約で決まっているんです。

普通、私たちが「誘致した」と聞くときは、誘致するということは町の形は誘致する側が決めて、そこに大学に来てもらうというイメージです。ところが国立はそうではなくて、大学が箱根土地と契約をしています。その契約書を読んでいただくと分かるんですが、こういうことをやることを請け負うとか、契約するとか、誓約すると、箱根土地は大学に全部一つ一つ約束しています。今、ここに書いてある道路もこれは箱根土地が大学に、例えばたまらん坂であれば第 6 条で約束しています。

ここには出てきませんが、当時予科が石神井にありましたので、石神井との交通の便をよくするために最善の努力するということも約束しています。それが今の多摩湖線になるわけです。そうすると、これは堤さんの学園都市構想ではなくて、大学が開発しようとした可能性があるということなんですね。堤さんが主、大学が従ではなくて、大学がリーダーシップをとって開発したのかも知れないと。

それでは、世にいわれる堤さんの学園都市構想とは何なのかというと、まず最初に分譲開始の順番に並べますと、大泉学園、小平学園、国立。分譲の開始は 1924 年 10 月で大泉学園が一番古い、次が小平、その次が国立ということで国立が一番最後になっていますけれども、開発の構想がいつできたかを見ると、大泉学園はどういう構想で開発されたのか全然分からない。小平は、国立大学町が雛形だという資料があります。国立は今、お話しした契約書があります。これからお話しする学長の談話があります。ですから構想がはっきりしている。国立大学町が雛形になっているという小平は、明治大学が最初に移転しようとします。1924 年 8 月に土地売買の契約と覚書を締結いたします。その後、明治大学は移転を巡って大もめにもめまして、結局は移転を取りやめるんです。

その顛末を載せた『明治大学紛擾に関する調査輯録』にこういう文章が出てきます。「小平村買収談は初め商科大学が保谷村（立川在）を買収したので、佐野（善作）氏から富谷氏（明治大学学長）に明大でも買ったら何うかとの話があり、…土地買収の契約文案は、私（甲能順明治大学理事）が商科大学と箱根土地との間に出来たものを見て書いた」と。そういうふうに出ています。つまり、明治大学が小平に移転する話は、商大から「どう？」 と、「それでは…」といって明治大学が動いた、となっているんですね。

このころの明治大学は商科大学の先生がものすごく沢山、教えに行っています。佐野善作学長は明治大学の商学部の教頭です、今はちょっと考えられないですけど。それから商議委員でもあると。商議委員は先ほどお話しした箱根土地の社長の藤田謙一も商議委員です。そこで二人に面識があるのは間違いないと思うのですが、それが、箱根土地が国立開発に登場してくるときに、どう絡んでいるかというのはまだ分からない。けれども、そういうふうにして明治大学の小平学園というのは、国立が雛形になっていると。

そうすると売り出しは小平の方が早いですけれども、アイデアは国立の方が早いと言えると思います。大泉だけがまだ分からない。大泉は、箱根土地の社員が羽仁もと子さんのところに自由学園の移転の勧誘に行っています。これは羽仁説子さんの回想の中に、そういう下りが出てきます。見に行ったけれども、大泉学園のところは、線路や何かがごろごろと置いてあって、とても学園の環境にはよくなさそうだというので、もっと奥の方へ移転することになります。

そこで、では、大学はどう考えていたんだろうかということを次にお話をしていこうと思います。佐野学長の談話は、プリントの 3 ページ目から 4 ページ目にかけて、皆さんにお渡ししてあります。これが『一橋新聞』に載った学長の談話なんですね。談話なものですから、4 ページの一番最後、「cf」の前に「(談)」と書いてあります。

要点は、大学を高級住宅地で取り込みたいというのが 1 つです。「理想的の大学都市は理想的の高尚な住宅地に囲まれてこそ初めて実現」。

それから、学校町にするんだと。学校町にするというのはどういうことかというと、初等から高等までの教育機関を全部そろえる、100 万坪の中に全部そろえる。しかも、佐野学長が談話の中で、できるだけ本学にゆかりのある人々の手で学校を経営したいと言っています。それから、娯楽機関は、あまり品のないものは立川とか府中にあるからいいんじゃないでしょうか、国立は大学都市らしい上品なものを、いらないとは言わないけれども、置くならば上品なものを。そういう話がこの中に出てくるのです。

さあ、そこで、住宅地で取り囲む、ですけれども、もう皆さんお分かりだと思いますが、この地図を見ると、大学は住宅地で取り囲まれていますね。その西側の「文」というのは国立学園小学校です、これも住宅地に取り囲まれています。音楽大学も住宅地に取り囲まれていますね。住宅地に学校が取り巻かれているというのは、このころに移転した学校、それは成城、成蹊、玉川、自由学園、東工大と数々ありますけれども、周りをすっかり住宅地で取り囲んでいるところは国立だけなのです。

小平も住宅地の南の端に大学のキャンパスがありますが、囲んでないのです。取り囲んでいるのはここ国立だけなのです。その取り囲むということを大学は目指しているわけです。取り囲むとなると、今の三多摩の八王子や何かにあるキャンパスのように、ともかくキャンパスに必要な面積だけ買って、そ

こにポコンと大学を置くのではだめですね。周りを住宅地にしなきゃいけない。広い面積を確保してその中に大学を置こう、そういうことを考える以外に方法がないわけです。

そして「学校町にする」ということですが、では、できた学校はどうだったのか。国立学園小学校は最初にできています、今も国立学園小学校。創立者は堤さんですけれども、顧問は佐野善作、一橋の学長が顧問になっています。そして、この頃の売り出し広告を読んでいくと「国立には理想的の小学校があり、追々中学校、女学校が設けられます。之等を総括して財団法人国立学園が設立されます」とあります。このころは学校法人という制度がないので財団法人なのです。財団法人明治大学とかそういうふうになる。そこで、財団法人国立学園の中に中学校、女学校、小学校。中等教育までは国立学園でやりますよという構想が出てきます。そして高等音楽学院、今の国立音大ですけれども、この顧問にはやはり佐野善作が入る。この小山作之助というのは作曲家でもありますし、音楽教育家なんですが、小学校唱歌で『夏は来ぬ』という歌がありますね、あの作曲家は小山作之助です。

今からご紹介するのは、音大の理事長の中館耕蔵という方の回想ですが、「大正 14 年の秋です。帝国ホテルで（新しく作る音楽学校の－引用者）披露会をやりました。この時に、現代では上野」ちゃんと地名が出てきますね。「を真似るより方法がないので、その規則通り学生を募集しますと発表したのです。…帝国ホテルでの発表の後、箱根土地の堤康次郎さんが私のところへ来て、国立を奨めたのです。」私はそれで決めた。「堤さんからお話があってから、実際に見て、縦横無尽にしかもきれいに道路が走っていて、まだ家はほとんどなく」、それでここに引っ越そうと決めたんだと、堤さんが呼んだんだと。

だけど顧問に佐野学長が入っていますから、おそらく佐野先生と相談して、文化と学問、それを高等教育のところでそろえようとしたのではないかと思います。これは『広報くにたち』というものに出てきます。こちらの『国立町報』は国立町が出したんですけど、『広報くにたち』、これは国立音楽大学の学内報です。その中にこういう話が出てきています。堤が誘致しているのは、これは間違いありません。

ただ、誘致するときの条件は、できたばかりの学校ですから、音楽大学の周りの土地を、誰に住まわせるかは音楽大学が決めてくださいと。つまり、音楽好きの人を周りに住まわせようとしたんです。そうすると、金切り声がうるさいとか、バイオリンが下手でうるさいとか、文句はでませんから、音楽好きな人で囲もう、と。それを音楽村と名付けました。学校の周りの何千坪かは、売ったお金は全部、音大にあげますよ、そういう契約をして誘致するんです。

さてそこで佐野学長のいう「本学ゆかり」ですが、こう見ると「ゆかり」どころではなくて学長本人が登場しています。

そして、これは飛行機からまいたビラなんですが、これを見ると「我等は最後の肉彈を以ても」今は経営的に大変ですからね。よせばいいのに、大泉と国立と小平と、さらに村山、いっぺんに 4 つ手を付けちゃったものですから、大変なことになるわけです。「我國最初のユニヴアシテー、タウンとして恥しからぬ立派なものに仕上げます」と。その次の下りです。「誓つて之を達成致します」。つまり大学町をつくるというのは、これを達成するというのは誓っていますよ、その約束を達成しますよ、と言っているわけです。そうすると、普通に考えると、この大学町のアイデアの出所は大学の方じゃないのと、そういう可能性が出てきますよね。

そこで堤さんがどう言っているかですが、みんな俺がやったんだと言っている時もあるのですけれど

も、まず最初は社員の回想で、箱根土地の社員ですが、「堤さんが理想肌だからというのじゃなく、佐野さんの提案で国立の町ができた」といっています。

堤さんもまた、2 個所でこういうことを言っています。この真ん中は「私の履歴書」ですけど「大正 12 年の大震災後、商科大学が移転することになった。私は佐野善作学長と共鳴して積極的に努力することになった」。共鳴するということは、響くのは、佐野さんの方が響いて堤さんが共鳴するわけですから、アイデアはどうも佐野学長から出たんじゃないかと。

それから『週刊スリラー』、本の名前だけでもスリラーですが、その中で堤さんと徳川夢声の対談があります。「商科大学の学長に佐野善作という、こりゃえらい人です。学者ではあるが、経世の才の秀でた人で、これからの学問は都会の真中ではいかん、といってあまり田舎へ遠のくも感心しないが、都塵を離れた環境のいいところでというので、二人で物色しましてね‥‥‥ 何がなんでも理想都市というので、全部 50 年、100 年先を目標に計画した。私の一生の記念事業になると思う。」

ここでもやはり、俺のアイデアで佐野さんを説得したとは言ってないんです。こう見てくると、どうも佐野さんのアイデアでこの町は開発されているのではないかと考えざるを得ない。

そこで最後に、ではなぜ住宅地で囲もうとしたかなんですけれども、ちょうど 1919 年、関東大震災が 1923 年ですが、1919 年に市街地建築物法と都市計画法という、2 つのとても大事な法律ができるんです。

都市計画法というのは今も、内容は変わっていますけど、ありますからご存じでしょうが、市街地建築物法というのは、今は建築基準法という名前になっている法律なんです。その 2 つの法律が初めて出てくるのが 1919 年。この法律に基づいて、東京の当時の 15 区という、山の手線のだいたい内側ですが、東側は中からはみ出して、西側は中に引っ込んでいるんですが、その広さの中を、住居地域と商業地域と工業地域に色分けをするんです。その案ができるのが、1923 年の 8 月です。

それで、これで指定してくださいねと、内務大臣に出したところで関東大震災になるんですが、そのときの住居地域、商業地域、工業地域の中で、それぞれに建ててはいけないものが決まっているんですね。商業地域では遊廓、花街、歓楽街、これは商業地域にしか建てられない。住居地域にも工業地域にも建てられない。それから工業地域には、工場で騒音、振動、臭気、煤煙の強いものは工業地域にしか建てられません。しか建てられないんですから、こういうところに住宅があっても別に構わない、普通の商店があっても構わない。けれども、遊廓、花街、歓楽街は商業地域じゃないとつくれない、となります。

一橋大学のあったところ、神田の一ツ橋は商業地域の中に入ります。住居地域というのは高台なんです。だから、駿河台のあたりは住宅地域です。ところが大学の周りは商業地域になってしまいます。神田はもともとあまり空気のよくない場所なのですけれども、その商業地域になったということは、大学としては教育環境はもう絶対によくならない。悪くなることはあっても良くならないのです。若い人が行きたがりそうなものが周りにできてしまうわけですから。

それで、大学として環境のいい場所はどこですかというと、自ずと、住居地域の中に建てるということになります。そこでおそらく、高級住宅地で周りを取り囲む、そういう考え方が出てきたのではないかと推測しています。推測ですから、さき程の原田さんの二の舞になるかもしれませんけれども、そう

いうふうに考えています。そうすると、この大学町は堤さんが開発して誘致した、あるいは堤さんの構想に大学が乗ったのではなくて、大学の構想に堤さんが乗ったのではないか。そこで大泉でやった、小平を頼まれてやったけれども、うまくいかなかったという形なのではないかというのが、今の私の想像していることなのです。

最後に、先ほど申し上げた伝説の検証をしていきたいと思います。

まず 1 つは、今までずっとお話してきましたが、「国立は堤さんが開発して商大を誘致した」という伝説です。この頃はさすがに聞かなくなりましたけど、しばらく前までは、「商大は堤さんからタダで土地を貰った」という説もあったんです。でも、土地は交換していますからタダではない。さてそこで、開発して誘致したのではないかという伝説ですが、大学の方にこういう大学町をつくりたいというアイデアがあって、それを堤さんが請け負ったのではないか、と私は考えています。

ではその次の伝説です。「国立駅舎の三角屋根の角度は富士見通りと旭通りの角度になっている」。この説を聞いたことがある方、本当だと思う方、手を挙げて下さい。手を挙げた方がいらっしゃいました、ありがとうございます。いいですか、旭通りと富士見通りの角度と同じですか？　どうですか？

違いますね。では、富士見通りと旭通りの角度はどう決まっているのですか。

旭通りのここは、直線は 2 つ点が決まれば引けますね、旭通りの角は大学のキャンパスの角なんです。もう 1 つは駅前広場の角なんです。ところが、富士見通りは作りが違います。富士見通りも大学のキャンパスの角、ところがもう 1 個の端が、富士山が見えるように引いたそうです。そうすると、ずれます、旭通りの付け根と富士見通りの付け根がずれているのが分かりますか。さき程の怪しいという写真を見ていただくと、この部分が三角になっていますね。

大学のキャンパスの角と富士山を結ぶと、駅前広場の角に来ないんです。ここの三角のところに、1950 年代までは、国立会という自治会の事務所があって、その裏側に火の見櫓が建っていたのですが、それはなくなった。そして今はこの三角はないのです。どうなっているかご存じの方？　毎日歩いていてもなかなか気が付かないものなんですよね。今日の帰りに駅にいらっしゃる方は、富士見通りを渡る前と渡った後で歩道の縁石がどういう格好をしているか見ていただければ、お分かりになると思います。

最後に、よくいわれる話です。「国立のモデルはドイツのゲッチンゲン」というのを聞いたことがある方？　前の市長さんがこれを信じてゲッチンゲンまで行ったんです。全然似てなかったと言っていましたけど。当たり前です、これがゲッチンゲンの町です。似ていますか？ 分かりにくいから別の画像で。黒くポツポツあるのは大学の施設です。つまりヨーロッパの大学はだいたい、古い大学はキャンパスがないです。というか、町の中にワーッと広がっているのです。このゲッチンゲンも同じで、大学関係の建物がバラバラと散らばっています。

それからヨーロッパの古い町というのは、だいたい城壁で取り囲んでいますから、真四角の形はほとんどないです。曲線で取り囲んでいる。ですから、中の道もそれに規定されて、真っすぐというのはなかなかないということなんです。そこで、今度は 2 枚の写真をお見せしますが、これはどうでしょう、満州の長春。これはどうでしょう、これは満州の奉天。似ていませんか。両方とも日本が設計したところなんですね。「ヨーロッパの町を模して」なんて言うけれども、日本人がやるとこういうことになる。

そこで、満洲の都市がモデルなのではないかと言う人もいますけど、私は違うのではないかな、と。なぜかというと、国立大学町の一番最初の地図は、旭通りの東側が今と違います。この方がしゃれている。ただこれは住宅地として売るときには売りにくい。このブロックの住宅地は南に面してないですよね。そうすると、どうしても南に面した方を買いますよね。そこで今のような道にして、どこを選んでも土地の条件は同じにしたのではないかと思います。ですから、最初から長春や奉天をモデルにしたのではないのではないかと思います。結果として、ソックリになったのではないかと。

そこで、ではなぜゲッチンゲンという話になってきたのか。ゲッチンゲンというのはドイツの有名な大学町です。明治時代はヨーロッパの地名を漢字で書きますから、ゲッチンゲンというのは、月が沈む原と書いて「月沈原」と書いたのですが、なぜゲッチンゲンか。

私が調べたところでは、一番最初にゲッチンゲンを言いだしたのは堤康次郎さんです。これは『谷保から国立へ』という国立町史、町の歴史の薄い冊子です。書いたのは原田重久さんです。その中で堤康次郎さんが「国立学園都市建設のころ」という文章を寄せています。1963 年の 1 月です。「学校中心の新都市を建設せねばならない。こう考えて、先年物故した重役の一人中島陟君を」、この中島陟さんの息子さんは、陟さんの偏がさんずいになりまして、渉さんと仰いますけれども、「陟君を海外に派遣して、ドイツの学園都市ゲッチンゲンその他を仔細に見学させ、充分な参考資料を集めた上構想を練り、大正 13 年にまず大泉学園都市に手をつけた。」次に国分寺（小平）に手をつけて、最後に国立で完成したという話なのですけれども。この「学校中心の新都市を建設せねばならない。」の前は震災を見てという話が出てきます。さき程の『週刊スリラー』や「私の履歴書」とはまるで違うトーンで出てきます。1963 年です。

ところがこの中島陟さんという方は、技師と出てくるのですが、プリントの 4 ページの一番最後にありますように、1922 年の 4 月に外国語学校のドイツ語科の専修を修了しまして 1922 年の 11 月ですから、関東大震災の前の年から 1925 年の 4 月までヨーロッパにいるんです。そうすると、重役の 1 人を関東大震災の後で派遣したのはおかしい、もう向こうに行っているわけです。おまけに、技師というのですけれども、外国語学校の卒業生ですから、語学技師かもしれませんが、土木技師ではない。これは、何だかおかしいと。

そこで、ではなぜゲッチンゲンになったのか、今は 2 つの可能性があると思っています。まず国立の中でこのことを見ていきますと、一番下に 1963 年、その前があるのです。1950 年代の半ばまでは、これはオックスフォード、ケンブリッジなんですね。これにあやかって、一橋もワンブリッジにしたらどうかという話もありますけれども。ところが 1958 年の国立文教地区協会、この会長は代々、一橋大学の学長先生ですが、その協会のビラに「国立町は･･･ 学園都市として設計されドイツの小都市を模した整然たる森の町として」という文句が出てきます。「森の町」。ドイツ人というのはバルト、ドイツ語で森をバルトというんですが、バルトが大好きなんですね。この間もドイツ人の先生がこのキャンパスに見えた。その時に出迎えた先生の話では、やはりキャンパスの中に足を踏み入れた途端に「おお、バルトだ」といって喜んだと。「あんなのはバルトじゃないよ」といっておいたよとか言うので、そんなことは言わないで「そうですよ」と言えばいいのにと思いましたが、過ぎてしまったことは仕方ない。

さて、1959 年の 11 月、次の年ですね、次の年のビラには「このような国立町の発展とともに商店街

も美観を増し森の町の中に明るいネオンが輝くことも国立町の特徴といえましょう。」こういうふうに出てきます。森の町＝ドイツ、これは、留学した経験のある先生方ならピンとくるイメージです。そしてドイツの大学町といえばゲッチンゲン。

もう 1 つの可能性は、堤さんはこの 2 年前に池田首相の代理として欧米諸国を歴訪して、ドイツでアデナウアーと会っている。そのときにアデナウアーに、俺の国にもゲッチンゲンと同じ大学町がある、それは私がつくったんだという自慢話をしたというのが、息子さんの小説の中に出てきます。そうすると、大学町としてのオックスフォード、ケンブリッジがイギリスならば、ドイツはゲッチンゲンというイメージのゲッチンゲンと、もう 1 つは、ドイツの森の町というイメージの両方が合わさってゲッチンゲンというのが出てきているのかな、と思います。どんなふうになっているか、さらに調べないとわかりませんが。

ところでドイツに詳しい先生に聞くと、国立に似ているドイツの町はどこかと言うと、必ず出てくるのが、これからご覧にいれるカールスルーエというところです。

きれいですよね、どこが国立と似ているんだと思うぐらい。上の方が森になっているでしょう。こういうふうに、町の近くに森があって、そこを市民は散策する、そこで自然を楽しむ、そういう生活がドイツでは大事にされているんですね、今に至るまで。東京は森なんていったら、電車に乗って 1 時間ぐらい行かないと森にならないけれども、こういうふうにドイツの町というのは、ここにも公園があり、奥に森がありますね。こういうイメージ、それを森の町。それからもう 1 つは、大学都市ゲッチンゲン、それがドイツで結び付いて、ゲッチンゲンがモデルという話になってしまったんじゃないのかなと、今はこう考えているところです。

そして、カールスルーエのこの道、先ほどのゲッチンゲンに比べると真っすぐですよね。そこのところがたぶん、道の作りが国立大学町と似ているんでしょうね。だいたい、ヨーロッパの古い都市はこんな真っすぐな道はなかなかないですね。それで国立が似ているというと、カールスルーエ、カールさんの保養所という意味なのかもしれませんが、この町が思い浮かぶのではないかと思います。

そろそろ時間になりましたので、これで私の話を終わらせていただきますが、国立の町は、今お話ししてきたように、断片的な資料といいますか、悪い言葉で言えば、片言隻句を寄せ集めながら、ああでもない、こうでもないと推測しないと分からないことばかりの町で、できてからわずか 80 年ぐらいしかたっていないのですけれども、ここまで分からなくなるものかと感心するぐらい分からない町なんです。

今日は、私の見た範囲の資料を突き合わせながら、そうなのではないかというお話をいたしました。今日の「国立大学町の開発と東京商科大学」という題の話の結論は、今の私の考えでは、この国立大学町というのは、大学にとって最もよい環境をつくり出したい。そうすると、住宅地の中にキャンパスを置くことが最善で、その最善を求めてここに移転地を定めたのではないかと推測しています。町をつくろうとするとなると、畑があったり、田んぼがあったり、民家があったり道路があったりすると、それを動かすだけでもものすごく大変なことになります。

そうすると、一面の森で、家もない、道もない、畑もなければ田んぼもない、そういうところを探して、そしてそこにキャンパスをつくる、その周りを家で取り囲む、そして良好な住宅地として周りを維

持することを考えたのではないか、それに協力者として堤康次郎が協力した形なのではないかと思っています。

　また新しい資料が出てきてひっくり返るかもしれませんが、今日のところはそんなふうに考えているということで、話を終わりたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。（拍手）